
二人の宇宙旅行

緋炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の宇宙旅行

【Nコード】

N 6 6 5 4 A

【作者名】

緋炎

【あらすじ】

最終兵器彼女の、チセとシュウジの話。

宇宙旅行一週間目

宇宙旅行一週間目

「あ！シュウちゃんシュウちゃん！木星だよ木星！！」

「うおお！あれが木星か！なまらでつけえんだなあ！スゲー！！」

「シュウちゃん！今度は土星だよ！わつか有るよわつか！！」

「知ってつか？ちせ、あのわつかって小惑星の集まりなんだぜ？」

「そうなの！？シュウちゃんよく知ってるねえ！」

地球を離れて、早一週間…僕達はこの状況を結構楽しんでいた。

「なあ、ちせ…」

「なあに？シュウちゃん？」

「なんか…新婚旅行みたいだな…これ。」

「…そうだね（照）新婚旅行で宇宙に来てるって考えると凄いよね…」

「地球初の新婚宇宙旅行だもんな…」

こんな感じだ…幸せと言えばこの上なく幸せだが…この旅行の行き

先を考えたると…ちょっと怖かったりする。

「ちせ、腹減ったよ…」

「あ！そろそろお昼の12時だもんね、待ってて！今から作るから！」

…作る？材料は？つつか…

「何で時間がわかるんだよ…時計着いてんのか？」

チセを見ると、制服にエプロン姿で、僕に背を向けて何かをしている…僕が覗いて見ると、チセがあるものを手にしている…それを見て僕は啞然とした…

「み…緑のた○き！？」

それはあのカップ麺だった…

「…え？てか、何であるの？カップ麺…チセ、地球から持ってきたのか？」

「違うよ、私が作ったんだよ！」

チセがほつぺたを膨らませて怒っている…そんなチセが可愛かったりする。

「作った…何から？」

「宇宙の…ちり？」

何で疑問型？

「…つまり、宇宙のちりを集めて、器から麺から全部チセが作ったって事か？」

「うん、全部手作りだよ？」

「…」

何でカップ麺なんだ…？

続く！

二週間目

2週間目

「…なあ、チセ？」

「なあに？ シュウちゃん。」

「真っ暗で何も見えないな…」

「そうだね、太陽系から離れたからね…」

「…」

「…」

「…」

「……電気……つける？」

「電気あるならもっと早く言えよ…」

「…ごめんなさい。」

僕は遂に太陽系を離れた。真っ暗で何も見えない…チセも見えなくて、消えてしまったんじゃないかと不安になった。
気を紛らわすために僕は、これからどこに向かうのか、何をするのか、チセと話し合う事にした。

「何をする…何をすれば良いのかな…」

「そうだなあ…宇宙の終わりはどうなっているかとか調べるか？」

「宇宙人を探すとか？」

「二人で住める星でも探すか？」

「シュウちゃん…あたし実体ないから…」

「…ならさ、チセを元に戻せる星を探そうぜ？」

「あたしを元に？」

「ああ、とりあえず宇宙人を探して、次にその宇宙人の星でチセを元に戻せるかを調べる、戻せるならOK、駄目なら他の星へ…どうだ？」

「でも、元に戻ったらもう宇宙には行けないよ？二人で住める星を探すんじゃないや、」

「チセを戻せるぐらいだし、宇宙船の一つや二つあんじゃないか？」

「そうかもしれないけど…」

何故かチセは不満そうだ…今にも泣きそうな顔で、下を向いている…もしかして…

「チセ、お前…元に戻りたくないのか？」

僕がそう言つと

「そんなわけないっしょや!!」

チセがキレた…

「あたしだって元に…人間に…シュウちゃんと同じ高校生に戻りたいに決まってるじゃない!!あたしだって…」

あたしだってシュウちゃんに触りたい!シュウちゃんの温もりを自分の肌で感じたい!えっ…Hなことだって…」

チセは泣き出してしまった。

そうだ…一番つらいのはチセなんだ。最終兵器にされたばかりに、人間ではいられなくなってしまった…

僕に触れることさえも叶わない…地球が滅んでも、いましめが消えることは無い…

「…ごめん。」

「あたし…恐いの…」

「怖い？」

「うん…シュウちゃんと離れるのが恐いの…」

「なに言ってたんだよ、ずっと一緒だろ？」

「だって、もし宇宙人を見つけても、宇宙人がいい人かはわからないじゃない…悪い人だったら、あたしとシュウちゃんを離れ離れにされちゃうかもしれないっしょや…」

「…」

「あたし…シュウちゃんと一緒にいたいのに。」

「…」

「触れないけど…Hも出来ないけど…それでも…一緒にいらればそれでいいの…」

「…」

「でも…シュウちゃんがどうしてもあたしに触りたいなら…」

「チセ…」

僕はチセの唇に自分の唇を重ねた。重ねた感触は無いけど、僕は今、確かにチセとキスをした。

「オレも…チセと一緒にいられるならそれでいい、それ以上何も望まない。」

「シュウちゃん…」

「まあ、触りたいって気持ちもあるんだけどな…」

「うん…」

チセが僕の胸にもたれかかる…僕の中に、チセが溢れてる…

そうだ、一緒にいれるだけでもいいじゃないか、実体が無くても、チセの髪はこんなに良い匂いがするし、

抱きしめた体はこんなに柔らかい……柔らかい？

「…？」

僕はチセのほっぺを引っ張ってみた…すると…

ムニユツ！

「いひゃい！いひゃい！ひゅっひゃんいひゃいよ…！」

柔らかい…

チセに…触れた？

僕らは互いに指差して

「…チセ…今…」

「シュウちゃん今…触って…」

口を大きくあけて啞然…

僕は確かめるようにゆっくりと、二度と離さないようにしっかりと、もう一度チセを抱きしめた。

触れた…

柔らかい肌…

髪の毛のいい匂い…

耳にあたるチセの吐息…

「シュウちゃん、あたし…」

「ああ…触れる…実体がある…」

突然の事で、僕らは現実を受け入れられなかった。本当なら喜びを共有するべきなのだが…

「なんか…うれしすぎて頭ん中真っ白だわ…」

「あたしも…」

僕らはしばらく、互いを抱きしめあっていた…触れなかった2週間を満たすように…

続くかも（笑）

三週間目

3週間目

「…つまり、オレがチセのことを強く想うとチセの映像が見えて…」
「もっと強く想うと、あたしが実体になって、シュウちゃんはあたしに触れるってことだよな？」

この前、僕はチセに触れた…が、あの後すぐに触れなくなった。
もう一度チセに触りたいという一心で、チセを強く想えばチセが実体化することを突き止めた。

「チセを強く想う…か…」

「愛の力だね（照）」

「バツ！はんかくせえこと言ってんな！」

実体化の仕組みがわかってから、チセはにやけっぱなしだ。
笑顔のチセはなまら可愛い…

「シュウちゃん…」

チセに呼ばれて振り向いた僕は見た…兵器の顔をしたチセを

「どうした！チセ！？」

「未確認飛行物体接近中。30秒後に接触の可能性、84%。シュウちゃん、どうしよう…」

「どう…って、避けられないのか？」

「回避成功確率、47%。……………ロックオンされました。着弾します。」

「え？いや…はあ？」

ズドン！！！！

「うおお！！え…チセ！大丈夫か！？」

「動力部損傷。近くの惑星に緊急着陸します。」

近くの惑星…僕はそれを見て驚きを隠せない。その惑星は地球そのものだった。だが、日本が中国大陸とつながっている。

「…何万年か前の地球か…」

僕は理解した。自分が何故生かされたかを…多分ここで、この星でチセと生きるためだ。

「チセ、北海道に着陸できないか？」

どうせなら、二人のふるさとで生きて行きたい…海からの景色をも

う一度見たいと思った。

「了解…わかったよ、シュウちゃん。」

ここで元のチセに戻った。

チセは着陸に失敗した。予想はしてたけど…

「…ごめんなさい。」

「…いや、仕方ないべや今回は…」

僕は一人で外へ出た。チセは外に出ると消えてしまうからだ。

「…やっぱ、違うなあ…」

僕は、この星と地球の違いを肌で感じた。

この星は、自然そのもの…空気は澄んでるし、人工物の匂いもしない…家も無いし、学校も無い…

僕の眼から涙が溢れる。

僕はチセの中に戻った。僕が中に入ると、チセの映像が現れる。

「おかえり、シュウちゃん！」

「ただいま…」

「外…どうだった？」

「…」

僕は感じたままの感想をチセに伝えた。

「そっかあ…」

チセの感想はそれだけだった。

「…チセ」

「ん？何？シュウちゃん？」

「…オレ、まだ考えがまとまらないんだけどさ、色々考えてんだ…」

僕の考え、それは、

外でもチセを具現化出来るようにしたい事、

自分の思いを何倍にも増やす機械を作りたい事、

チセと、子供を作りたい事…

「…」

チセは無言で聞いている。僕が話し終わると、チセは僕に抱きついて来た。

「シュウちゃん…やろつよ、どつすれば良いかは…わからないけど、シュウちゃんならきつと…」

「チセ…」

僕はチセを抱きしめた。

〳〵10年後〳〵

「お母さ〳〵ん、お腹すいたよ〳〵！」

「お父さんまだ〳〵？」

「ん〳〵、もうちよつとしたら帰って来るんじゃないかな？」

「ただいま〳〵」

魚をもったシュウジが帰って来る。

「おかえりお父さん！お魚釣れた？」

「おかえり〜！」

「ただいま、カズ、ハル、良い子にしてたか？」

「うん！今日はね？お母さんが掛け算教えてくれたんだよ？」

「にいちがに！ににんがし！にさんがろく！」

「そうか〜…チセ、ただいま」

「おかえり、シュウちゃん！」

あれから僕は、チセの部品を使って思いを増幅する機械を使った。その機械の周りなら、チセは外でも具現化出来る。子供も作れた。

「シュウちゃん…」

焼き魚を食べながら、チセは言った。

「私、幸せだよ…」

「…これが、この星の始まりの物語だよ…」

老婆が子供達に話しかける。

「ねえ、その後シュウジとチセはどうなったの？」

一人の子供が聞く。

「…忘れた…」

「ええ！忘れちゃったの？」

残念がる子供達。

「な〜に、そのうち思いだすよお…」

老婆は歩き出す。

「あ！待ってよ、もっとお話してよお！」

「今日はおしまいだよ、また明日ね…」

微笑む老婆。

「ええ〜！もっと聞きたいよお…ねえ、ハル婆ちゃん！」

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6654a/>

二人の宇宙旅行

2010年10月9日11時50分発行